

Title	個性性と邂逅の倫理 -九鬼哲学の射程-
Author(s)	宮野, 真生子
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/72438">http://hdl.handle.net/11094/72438</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

## 論文内容の要旨

氏 名 ( 宮 野 真 生 子 )	
論文題名	個体性と邂逅の倫理—九鬼哲学の射程—
論文内容の要旨	
<p>九鬼哲学とは、人間の生きる具体的現実（実存）とそこに働く論理のありようを、偶然性を核として明らかにし、「存在一般」への通路を開く形而上学であると言える。本論文がめざすのは、九鬼哲学を形づくる実存・論理・形而上学の問題とその関係を解きほぐし、その全体像を明らかにすることである。そのための作業を、本論文は二部に分けて進めていく。まず、第一部「存在論理学としての九鬼哲学」は、九鬼が自らの思索を練り上げる際に参照した西洋の哲学者からの影響関係を分析することで、偶然性を中心とする九鬼独自の「存在論理学／生の論理学」が成立したプロセスを明らかにし、現実を構成する様相論理のあり方と、様相論理を経由した存在一般への道を論じていく。いわば、九鬼哲学の理論的骨格を解明する部分である。さらに第二部「偶然を生きる倫理を目指して」では、九鬼が存在論理学の先で目指した形而上学の形と、偶然性を生きる実存と倫理の問題を、同時代の日本の哲学者との比較を通じて考察する。各章の概要は次の通りである。</p> <p>第一部は第1章から第5章からなる。第1章では、若き九鬼が自らの哲学観、その問題意識を形成する際に批判的参照点となった新カント派、とくに西南学派との関係を取り上げた。九鬼と新カント派の関係は従来ほとんど言及されてこなかったが、ヴィンデルバントの「偶然論」と九鬼の『偶然性の問題』は論点の一致と構成の対称性において目を引くものがある。偶然に対するヴィンデルバントと九鬼の視点の違いは、彼らの哲学観の違いに起因しており、両者の議論のズレを明らかにすることは、九鬼の問題意識を浮かび上がらせるだろう。第2章では新カント派を離れて、みずからの問題意識を哲学的問いへと練り上げ、独自の的方法論に至るプロセスを『偶然性の問題』以前の九鬼の論文から追跡し、そこにあらわれているハイデガーからの影響を明らかにした。第3章・第4章では、九鬼独自の「存在論理学／生の論理学」の内容に注目した。彼は自らの偶然性の分析を存在論理学と名指すものの、それがどのような学であるのかをまとめた形で定義することはない。しかし、手がかりはある。それが、九鬼が偶然性の様相分析を進める際、参考にしていくニコライ・ハルトマンの様相論である。第3章ではハルトマン流の偶然性／可能性解釈から九鬼が何を引き継ぎ、また何を問題視したのかを論じることで、九鬼の論理学に対する独自の立場と、存在論理学の狙いを明確にした。以上の作業を経て、第4章で『偶然性の問題』および「哲学私見」に基づき、存在論理学の全貌を詳らかにすることを目指した。そのうえで、第5章では再びハイデガー哲学との関係を取り上げた。問題は、「存在一般の根源的会得」を目標とし、実存から問いを立てることを重視した九鬼がなぜハイデガーのように時間性ではなく、様相性へ向かい、論理学を志向したのか、ということである。この理由を問うことは、九鬼哲学における生の現実と論理および形而上学という三つの次元の関係を明らかにすることにつながる。以上のように第一部は、ヴィンデルバント、ハイデガー、ハルトマンとの関係から、存在論理学という学の根本にある問題意識が成立した過程を分析し、その方法的意義を考察することで、九鬼哲学の理論的骨格の検討とする。</p> <p>もちろん、九鬼哲学の魅力は、こうした理論的側面に尽きるわけではない。実存性と論理、そして、形而上学的視点はつねに連関している。偶然を問うことは、偶然を生きる人間の足下を掘り崩し、世界と自己の根源を疑問に付す。世界の根源が偶然であるとして（原始偶然）、この世界を生きる人間はただ偶然のまにまに流れていく存在なのか、それとも形而上的絶対者と何らかの関わりをもつのか、原始偶然を核とした実存と形而上的絶対者の関わりが問題になってくる。それは同時に、偶然をいかに生きるかという運命をめぐる論点と、偶然のなかで関わる他者との倫理の形を問うことにつながっている。これらの課題を九鬼は同時代の日本の哲学者との対話において獲得した。第二部では、彼らとの対話の展開を通じて、九鬼哲学の問題点と可能性を検討し、九鬼哲学のもつ射程を測っていく。そのために、まず第6章と7章では、田辺元との対話に焦点を当てる。というのも、形而上的絶対者と個体の関わりを考えることから倫理</p>	

を問うことの必要性を九鬼に対して示唆したのは、田辺元だったからである。「種の論理」で一般に知られる田辺だが、彼にとっても個体と偶然性の問題は生涯を通じて躓きの石であった。それゆえ、田辺の議論は時に九鬼の偶然論に鋭く突き刺さる。第6章では、九鬼が『偶然性の問題』の基となる「博士論文 偶然性」を提出後、論文審査を担当した田辺との間でやりとりした往復書簡に注目した。具体的には、種の論理以前の田辺哲学を概観することを通じて、個体の偶然性と形而上的絶対者をめぐる両者の論点を比較し、九鬼が考えた偶然を生きる個体のありようを解明した。これに対し第7章では、「種の論理」および最晩年『マラルメ覚書』で展開される田辺の偶然論から、九鬼偶然論の問題点を探ることで、そもそも「偶然性を生きる」ということがいかなることなのかを、選択と運命の観点から分析した。だが、偶然性を生きるとは、私一人の問題ではない。そこにはつねに他者が存在する。偶然を生きる自己と他者の関係を九鬼は「間柄」という言葉で語っているが、この言葉は和辻哲郎の倫理学から着想を得たものであった。第8章では、九鬼が求めた偶然性から始まる倫理の形を和辻哲郎の間柄論と重ね合わせることで、九鬼の倫理の可能性を探ることをおこなった。

## <目次>

### 序論

- 第1節 論理と生命
- 第2節 問いのありか

## 第一部 存在論理学としての九鬼哲学

### 第1章 「哲学」とは何か

- 第1節 ヴィンデルバントの学問論と「偶然論 Die Lehre vom Zufall」
  - 1) 新カント派の位置づけ
  - 2) ヴィンデルバント「自然科学と歴史」における二つの学的方法
  - 3) 「偶然論 Die Lehre vom Zufall」
- 第2節 九鬼周造の「人間観」と「哲学」
  - 1) 「人間学とは何か」
  - 2) 「哲学私見」における哲学観
- 第3節 『偶然性の問題』から考える九鬼哲学の問題設定
  - 1) 偶然性とは何の問題なのか
  - 2) 『偶然性の問題』概要
  - 3) 偶然性をいかに扱うべきか

### 第2章 「存在論理学」への道

- 第1節 人間の現実と哲学—「講義 偶然性」—
- 第2節 存在と無をめぐる問題系
- 第3節 「文学概論」における問題の発見
- 第4節 存在論理学の狙い
  - 1) ハイデガー『存在と時間』からの影響
  - 2) 「哲学私見」から見る存在論理学の全体像

### 第3章 「存在論」と「様相論理」—ニコライ・ハルトマンの批判的受容—

- 第1節 新たなる様相論理へ
  - 1) 様相性の三体系
  - 2) ハルトマンにおける存在論的現実性
  - 3) 九鬼のハルトマン批判
- 第2節 ハルトマンの「存在論」と「様相論理」
  - 1) 『存在論の基礎付け』から見るハルトマンの存在論

- 2) 『可能性と現実性』における様相分析
  - 2) - i 偶然性の位置づけ
  - 2) - ii ハルトマンの様相表
- 3) ハルトマンの問題点

#### 第4章 「存在論理学」とは何か

##### 第1節 存在形態と存在様相

##### 第2節 現実と様相

##### 第3節 現実の生産点としての偶然性

#### 第5章 存在論と実存論的分析—ハイデガーからの影響—

##### 第1節 第一の批判—実存論的視点から

- 1) 実存をめぐる問題設定
- 2) 『存在と時間』へのまなざし
- 3) 偶然性という結び目

##### 第2節 第二の批判—存在論的視点から

- 1) 「現在」をいかに捉えるか
  - 1) - i 『存在と時間』における現在の位置づけ
  - 1) - ii 九鬼にとっての現在とは何か
- 2) 他と出会うことと超越の構造
- 3) なぜ、「出会いの今」を重視するのか
  - 3) - i 九鬼が「出会い」に込めた意図とは
  - 3) - ii 存在的か、存在論的か

### 第二部 偶然を生きる倫理を目指して

#### 第6章 偶然性の形而上学と個体論

##### 第1節 田辺元・九鬼周造往復書簡からみる問題の所在

- 1) 九鬼周造博士論文「偶然性」
- 2) 往復書簡における二つの批判

##### 第2節 初期田辺における偶然性と合目的性

##### 第3節 『偶然性の問題』における個体性の真相

- 1) 分裂する形而上的絶対者と個体
- 2) 「個物の起源」と他者との出会い

#### 第7章 偶然と選択、あるいは運命について

##### 第1節 田辺元における個体と偶然性

- 1) 生成する身体と現在の動性
- 2) 「社会存在の論理」から考える「個体」と九鬼偶然論の問題点
- 3) 「社会存在の論理」における個体の行方

##### 第2節 運命を生きるとはどういうことか？

- 1) 『マラルメ覚書』における絶対偶然
- 2) 偶然性を生きるという選択をめぐって
- 3) 九鬼周造の運命論

#### 第8章 偶然性の倫理とは何か

##### 第1節 二つの間柄論

- 1) 「私である」ということ
- 2) 「私がある」ということ

## 第2節 実存と「がある」「である」こと

- 1) 二つの「存在」と「実存」
- 2) 「この私がある」とはどういうことか？

## 第3節 九鬼と和辻の交差する地点

- 1) 日常における「私がある」ことの唯一性とは何か
- 2) 「やましき」という倫理

## 結論

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 宮野真生子 )			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	檜垣立哉
	副 査	教授	ウォルフガング・シュベントカー
	副 査	准教授	野尻英一
	副 査	教授 (京都工繊大学)	伊藤徹

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、おもに日本の昭和初期に活躍した哲学者である九鬼周造の『偶然性の問題』を中心とし、九鬼が、その欧州滞在から得た知識を吟味することにより、さまざまな哲学者との関連において主著『偶然性の問題』を形成する過程を、その草稿ともいえる講義録や博士論文などの関連も丹念にたどりつつ明らかにし、さらにはそこから導き出される生の倫理を提示するものである。

九鬼周造の思考は、個体がつ生の一回性とそれ自身の論理との双方をともに認め、それによって個別と普遍の人間における分裂したあり方をそのまますくいだし記述することに特徴がある。

論文自身は存在論理学として『偶然性の論理』が形成される過程を描く第一部と、その倫理的な広がり进行を思考する第二部に分かれ展開される。

第一部においては九鬼が、当時の現代思想であった新カント派のなかから、とりわけヴィンデルバントとハルトマンをとりあげ、前者からは偶然性という問題への扱い方を受容するとともに、そこでの叙述の順序を逆転させ、ヴィンデルバントが個別と普遍の分裂において論理的なものしか見出せないことに対し、九鬼がその分裂そのものを人間のあり方の「驚き」の情動において捉えたことが指摘される。またハルトマンについては様相論というかたちでその記述を引き継ぐものの、ハルトマンがあくまでも静的な様相記述をなすにとどまるのに対し、九鬼はそこに有ににくいこむ無という動的な事態を織り込んだことが提示される。

その過程において九鬼は存在論理学というかたちで自己の議論を突き詰めるのであるが、そこでハイデガーの影響が語られる。しかしここでも先駆的決意性における未来を重視するハイデガーに対して、九鬼が「現在」という驚きの位相や、そこでの動的な出来事の成立を重視することを指摘し、ハイデガーが軽視しがちであった空間性と他者性が九鬼の議論において重要であることが述べられる。かくして九鬼は、現在性を中心とした出来事の論理をあくまでも様相で描くという独自の試みをなしていることが主張される。

第二部においては、日本思想において関連のあった田辺元および和辻哲郎の思想との対比が行われ、他者との邂逅が重視される九鬼の偶然論が、田辺自身の偶然論との連関をもつことや、和辻の間柄概念との検討がなされ、社会性との関連も交えて、九鬼自身の邂逅の倫理をより強く浮き上がらせていく。とりわけ田辺との往復書簡による九鬼の議論の進展の提示など、日本哲学研究の枠内においても見るべき点は多い。

学位申請者の議論は、上記のように、さまざまな哲学者との関連のなかで九鬼が独自の偶然性の哲学を形成してきた理路を明確に描きつつ、九鬼自身の現在中心的で他者との邂逅を重視する議論そのものの成立背景を明示している。それとともに、とりわけそのなかでの動的なものの様相による記述という議論の成立が明確に記述されている点で、まずは日本における西洋哲学の受容と展開のひとつのあり方を提示するとともに、日本哲学の内部でもとりわけ田辺や和辻との関連を通じて、九鬼の倫理の独自性を浮き上がらせているという点で評価されるものである。特に『「いき」の構造』での日本の美意識の探求において評価されがちな九鬼であるが、哲学的な意味での主著である『偶然性の論理』を軸に据え、その成立と本質を丹念に辿ったものという意味で、日本哲学研究という観点からも、偶然性という主題がそもそももちえざるをえない人間そのもののあり方と倫理に独自の光を当てたという点でも大いに評価に値するものといえる。

よって、本論文は博士(人間科学)の学位論文として十分価値あるものと認める。